



つなげたむ、古代の知恵

藤布

木の布工房 遊絲舎



149

148



丹後・木の布工房 遊絲舎の藤布

途絶える運命だった丹後の藤原を
懸命に守り、伝える

た。しかし、冬、深い雪に閉ざされる上世屋では、つい最近まで、藤布づくりが続いていたのです。

古来 人は身の回りにある植物から綿糸を取り出し、衣類や生活の布を織り上げていた。麻、しな、葛、そして山藤の蔓から生まれる藤布もそのひとつ。「木の布工房 遊^{ゆう}」の代表である小石原将夫さんは、雪深い山村で消える寸前だったその布を、ひたむきな思いで継承する。

146
ページ

丹後半島の山藤。4月下旬から5月にかけての藤蔓が、皮を剥ぎやすいという。

京都府宮津市にある日本三景・天橋立から車で30分ほど。藤布の里として知られる山深い里、上世屋に向かう途中、新緑の山のそこかしこで山藤の淡い紫の花を見かけました。蔓を巻き付けた木全体から花房を揺らす姿に合わせると、美しさとともに、藤のもつ生命力を実感します。その生命力が、巻き付かれた木の生育を邪魔するところから、山の民にとって藤蔓伐りは大切な仕事で、やがて繊維として使うことを思いついたのでしょう。藤布は日本各地の山里で織られ、『古事記』に藤布にまつわる神話が残っているほど古い布なのですが、膨大な手間がかかるため、つくることが厭われ、次第に廃れていきました。

名人だったおばあさんの娘たちや、保存会で学んだ人たち約7人ほどが今も“藤縫み”と呼ばれる糸づくりをしています。太い糸、細い糸、人それぞれに個性ある糸を績みますが、どれが上手、下手なのではなく、糸に合つたように使つてこそ藤布の味わいになる、と小石原さんは言います。

「ほんとうに十人十色で、績んだ人の個性がわかり、樂しいんですよ」

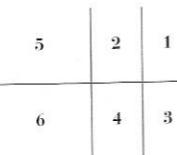
山が荒れ、素性のいい蘿蔓不足が悩み

藤布つくりの古い資料を見ていたら、山から伐り取つて山から降りてくるおばあさんの姿がありました。木と草の生い茂った山に入り込み、木に登るように蔓を鎌で伐り取る小石原さんの仕事ぶりでさえ、大変そうだったのに、老いた女性たちがこともなげにこなしていました。だから驚きます。なんというたぐましさ。こうした女性たちがいてこそ、藤布の野趣を楽しむことができたのです。

「藤蔓ならなんでもいいわけではなく、7～8年もので、枝の出でないまつすぐなものを探します。枝があると、纖維の流れにクセがあるので、糸がつくりにくいんです」

親にしたい藤は、前もって星をつけておき、時期がきたら「藤伐り」する。昔から藤は、山林所有権に関わりない限り、自由に伐り取れる。木を枯らすほどの生命力があるゆえ、アラソに分ける。纖維の方のだろう。2伐り取ったまでも木槌で叩いた後、一気に皮を剥ぐ。さらに対皮(外皮)を剥ぎ、さらに鬼皮(内皮)を剥ぎ、最後に木の芯(末)を間違えてはいけない。さすがに、頭に結び目をつけて、手干しする。糸績みのときも、さにも使う。こうばし」です。

昔ながらの仕事は、作業はもとより、素材や道具、加



力強いしなやかさに小石原さんは励まされ、家族や仕事仲間とともに、たゆまぬ努力をなさっています。もちろん、つくるからには売ることも必要。それもまた、今の時代、決して楽ではありません。けれど、丹後の人々の強靭な精神力に支えられたこの布の真の魅力を、「ぜひ守

り続けてほしいのです。藤布とともに20年。
結城紬の産
地で修業し、後継ぎとして戻ってきた息子の充保さんが、
藤布の技術保持者に加わり、今、小石原さんは、新たな
意欲に燃えている印象を強く受けました。20年を機に、
能『鶴銅』に“藤の衣の玉だすき……”と謡われている
能衣裳を制作。ドイツ年の国際交流イベントで紹介され
たり、パリのクレアポール大学で展示されるなどで、話
題となりました。更なる20年に向けての、幸先いいスタ
ートです。

